

野上豊一郎 英文  
學者。東京帝國大  
學英文學科出身。

## 一六 能面の表情

野上豊一郎

人間の顔面筋が演戯に際して、どれだけ複雑に感情の徴候を細別して表現し得るかを考へて見るに、舞臺上の技巧を最も多く経験してゐる役者であつても、彼等自らの意志の力で顔面に表はし得る感情の種類は極めて狭く限られたもので、多くの場合、彼等は感情を交へない模倣作用を以て表現するに過ぎない。たとひ感情の表現を能くその顔面によつてなし得る役者であつても、必要に応じて、任意にその顔を赤くしたり青くしたりして見せることは不可能である。

更に、不便なことには、人間は誰もその顔面をば唯一つしか持合はせてゐない。ちやうど聲樂家が何時も一つきりの聲で歌

はねばならぬ如く、役者は持つて生れた唯一つきりの顔面であつて、どんな性格をも演出しなければならぬ困難に置かれてゐるのである。

この困難から役者を救ひ出したものが假面である。假面の發明と共に、今まで演出上の障碍となつてゐた性年齢種屬等の差別が取除かれて、男が女となり、青年が老人となり、人間が超自然物となることが容易になつた。同時に、又それに依つて扮装の間が節約されるやうにもなつた。つい十分前まで艶麗な白拍子として舞つてゐた役者は、何等の困難なしに、唯その假面と装束とを取替へることに依つて、精悍な武將の幽霊として出現することが出来るであらうし、また鐘の中に飛込んだ美しい少女は、その鐘の引上げられる時には、既に角の生えた、唇の裂けた、悽愴

な悪鬼と化してゐることが出来るであらう。さうして、何よりも能面の名譽であることは、その一枚の板に彫られた表情の均勢が、人間の肉の顔の如何なる調和を以てしても企て及ばない程の高貴さを保持してゐることである。この



(増) 面 能

ことを如實に實感するためには、能面が能役者から全然奪はれた場合を假定して見るとよい。若し「羽衣」の天人の端麗な増の面の代りに、或役者の脂ぎつた角張つた顔に白粉を塗り、厚ぼつたい唇に紅をさし、悪賢い眼球を微動させながら、いや疑は人間に在りなどと諂つてゐる姿を想像して見たならば、果して能の「羽衣」の與へる簡淨な清楚な趣の百分の一をも期待し得る者があらうか。それだ

増の女面の一種で、増阿彌の創意になる型。

けては、肉の顔面は屢、私どもの想像が舞臺上の性格の内面に穿入しようとするのを妨げることさへある。顔面を單純化し、淨化し、様式化した假面は、或意味に於て最も完全な顔面である。これに對して、肉の顔面は、それが如何に美しく出來た顔面であつても、決して完全な顔面であるとは云へない。市村某の演じる芝居を見ることは、要するに市村某の藝術的個性に興味を持つことであつて、それはまた彼が尾上某中村某と如何に違つた技術を示すかの興味である。随つて、彼の扮する人物は如何なる瞬間にも市村某の顔面である。然るに、能に於ては、たとひその假面の下は觀世某の顔であつても、實生某の顔であつても、一度その假面を懸ければ、同時に其處には想像して貰ひたい種類のものが容易に想像される。さうして、肉の顔面を通して絶えず聯想さ

れがちなその人の實生活上の事件などは、比較的完全に遮蔽されて、藝術的幻影の築き上げられることが容易で且つ迅速である。これは個性よりも類型に依つて、寫實よりも様式化に依つて、それ自らの世界を造り出さうとする能に於ては、最も適當な表現の具を見出したものと謂ふべきである。

若し能面の缺點として擧げ得べきものを求めるとすれば、その目が動かなくなつたり、唇が動かなくなつたりすることであらう。これは感情表出の上に少なからぬ缺點であるかの如く見える。併し、この缺點と思はれるものが、能面に於ては十分に償はれるやうに工夫されてゐる。

先づ唇について見ると、女面などでは、それをはつきりと開いた場合と、全く閉ぢた場合と、二つの場合を豫想して、その中間を

取り、程よき半開の形に彫られてゐる。その半開は閉ぢてゐないことを意味する程度のものであるから、假面の傾斜の角度に依つては固く結ばれた唇とも見え、また別の傾斜に於ては晴やかに開かれた唇とも受取られる。能面は普通に幾らか俯向け氣味に懸けられるきまりであるが、必要に應じてはクモラセで、即ちそれを一層俯向けて、憂愁の陰影を多くしたり、また反對に俯向けにテラシて、朗かな光を與へたりする。さうして、唇はそれに應じて開閉されるが如き印象を與へ、面のクモラサれた時には閉され、テラサれた時には綻びて微笑を湛へるが如く見える。この効果を最もよく助けるものは、左右の口角に近く口輪匝筋と笑筋と接してゐるあたりに、微妙な剝抜が作られて、其處になごやかな微笑が無盡藏に蓄積されてゐるかと思はれるやうな用意

の施されてゐることである。何故にこの用意は微笑のためのみに行はれて、反對の表情に對しては無視されてゐるかといふと、能面は本來悲劇的情調の上に作られたものであるから、普通の状態に於ては皆多少の憂鬱を帯びてゐる。それ故に、若しそれに變化を與へるとすれば、それは、如何にすれば晴やかな快活な表現に變へ得べきかといふ工夫を加へることに限られるわけである。

次に目については、これは唇よりも重要な役目を持つてゐるだけに、この木製の心の窓を如何にして活かさうかといふことに關して、原作者のなみなみならぬ苦心の迹が窺はれる。見開く場合と細目にする場合とに對しては、唇の閉閉と同じやうに、面のテラシ方クモラセ方に依つて容易にそれが行はれる。肉眼に

於て、目を伏目にする場合には、上眼瞼舉筋が重く垂れて、眼球をその中に隠すのであるが、役者が假面をクモラセルことは、それと同じ効果を生ずるのである。反對に面をテラスと、眼輪匝筋の全部が明るい平坦な平面を作り、同時に眼瞼溝も眼瞼頬溝も皺眉筋も消えて了ふので、憂鬱の表情は一つも見られなくなるのである。

併し、何よりも困難なことは、假面に於ては、目にとつて一番大切な眼球の動かないことである。これに對して如何なる補充策が工夫されてゐるかといふに、能面作者は、動かない眼球を白い角膜の上に全部浮かださせることの不利益を慮つて、眼球の上端と下端とを用心深く眼瞼の中に隠し、角膜は僅に眼球の周囲のみを白く残して、他は内眦の側も外眦の側も思ひきり黒く染

め、刳抜かれた眼球と角膜の白い部分との對照を際立たないやうにし、さうして、その刳抜かれた二つの眼球に、正面から見ると平行する視線を投げるやうな位置を保たせてゐることは最も稱讚に値することである。

今若し假面を用ひない役者が舞臺上で或一點を凝視する必要を感じた場合には、顔面を強くその方向へ振向け、一方の眼球を以てその一點を直視すれば、他の眼球からの視線は都合よくその對象物の上に於て交錯するが如き印象を與へ得るのである。併し、能に於ては、斯くの如き凝視を必要とする場合はそれほど多くなく、舞つてゐる間の大部分は、寧ろ艶麗高貴な顔を保つてゐることの方が大事である。

それ故に、假面は、刹那的に如何なる強烈な感情をも表はし得なければならぬが、常態としては無表情に近い表情に安定してゐて貰ひたいのである。内に十分な能力を蓄積してゐて、常はその蓄積の量を豫想させないやうにあつて貰ひたいのである。この要求に對する考慮の結果が、以上述べた如き、目昏その他の無表情的表情となつたのである。随つて、それは喜悅にも、悲哀にも、快活にも、憂鬱にも、いづれにでも、變り得る中間的の表現であるから、私は假に名づけて、これを中間的表現と呼ぶ。併し、能面はすべて中間的表現を持つてゐるのではない。中間的表現は能面の窮極の到達であつて、この伶俐な表現法を思ひつくまでには、能面は様様の經驗の段階を踏まねばならなかつた。

「能・研究と發見」